「銀河の一票」第７話から考える 家族支援の大切さ

ドラマが投げかけた問い

「銀河の一票」第７話で描かれた悲劇はフィクションです。しかし、不登校やひきこもりによって孤立し、苦しみを抱えている子どもや家族が存在することは現実です。

だからこそ私たちは、この物語を単なる「かわいそうな話」として受け止めるのではなく、「現実の中で同じような悲劇を防ぐために何ができるのか」という視点で考える必要があるのではないでしょうか。

今回の第７話は、不登校支援や家族支援を考える上で、多くの示唆を与えてくれる事例として捉えることができます。

子どもの居場所を失わせてしまう危うさ

物語では、保健室登校を続けていた生徒が、自分の居場所であり心の支えでもあった人形作りを否定され、追い詰められた末に自殺を図るという重いテーマが描かれていました。

もちろんドラマの中の出来事ではありますが、現実社会においても決して他人事とは言えません。子どもが大切にしているものや、自分らしさを表現できる居場所を失ったとき、その苦しみは私たちが想像する以上に深刻なものになることがあります。

親もまた支援を必要としている

物語の中で母親は、子どもの将来を心配するあまり、人形作りに熱中する我が子の思いを理解できず、親子の対立が深まっていきました。一方で養護教諭のあかりは、子どもの才能や思いに寄り添い続けます。しかし、学校という立場では家庭の中にまで深く関わることには限界があります。

不登校やひきこもりの支援に携わる中で私が強く感じるのは、子ども本人への支援と同じくらい、家族への支援が重要であるということです。

保護者の多くは、誰にも相談できないまま不安や焦りを抱えています。「このままで大丈夫なのだろうか」「将来どうなるのだろうか」という思いを一人で背負い続ける中で、子どもを思う気持ちが強いほど、結果として子どもを追い詰める関わり方になってしまうこともあります。

もし家族を支える人がいたなら

もし、このドラマの母親のそばに継続的に話を聞いてくれる支援者がいたらどうだったでしょうか。

不安や悩みを安心して話せる場所があれば、母親自身の心に少し余裕が生まれ、子どもの気持ちや才能を別の角度から受け止めることができたかもしれません。親子関係が大きく悪化する前に、対話のきっかけをつくることもできたのではないでしょうか。

家庭に寄り添う訪問支援の役割

そのような役割を担うことができる支援の一つが、精神科訪問看護師による家族支援です。

訪問看護師は家庭を訪問し、子どもだけでなく保護者の悩みにも耳を傾けながら、親子双方に寄り添った支援を継続的に行います。家庭という生活の場で関わるからこそ見えてくる課題があり、学校や関係機関とも連携しながら、その家庭に合った支援を進めることができます。

不登校やひきこもりの問題は、決して子どもだけの問題ではありません。子どもを支える家族もまた支援を必要としている存在です。

悲劇を防ぐためにできること

悲しい出来事が起きてから対応するのではなく、その前の段階で家族の不安や孤立を和らげることができれば、未来は大きく変わるかもしれません。

「銀河の一票」第７話は、子どもの声に耳を傾けることの大切さと同時に、保護者自身も支援の対象であることを私たちに問いかけています。

私たちNPO法人の使命は、その問いに対して行動で応えることです。家庭に寄り添い続ける訪問支援を通して、一つでも多くの孤立を防ぎ、子どもと家族の未来を支えていく。その積み重ねこそが、同じような悲劇を未然に防ぐ力になるのではないでしょうか。